山梨縣布達之寫

明治九年九月

三

一
C2
1113
53-06
大四二二
本

明治九年九月

兩假名附

山梨縣布達之寫

甲府常盤町四番地
又新社發兌

C3
1113
53-06

本縣甲第二百七十一號より第二百九十四號まで
太政官第百拾三號より第百二十二號まで別に第八十二號
大藏省甲第十八號より第十九號まで
內務省甲第三十四號
司法省甲第十一號
工部省第十五號より第十六號まで
文部省第四號
地租改正事務局甲第三號
乙第七十七號より第九十二號まで

TOKYO LIBRARY

稿索引

明治文庫

兩假山知縣名附寺領上地處分公布抵觸の件伺出日限	一丁
甲第二百七十號	
甲第二百七十一號	
太政官第百十三號 八月十一日	軍武官表御改正	一丁
甲第二百七十三號 同十六日	
大藏省甲第拾八號 八月九日	公債証書抽籤之件	二丁
甲第二百七十四號 同日	
大藏省甲第拾九號 九月八日	同件	四丁
甲第二百七拾五號 同十八日	
內務省甲第三拾四號 九月十一日	米油限月賣買禁止の延期云々	五丁

甲第二百七拾六號　同十九日
○太政官第百拾四號　九月十三日　地方裁判所ヘ被置　六丁

甲第二百七拾七號　同廿日
○太政官第百十五號　九月十三日　上等裁判所分轄　八丁

甲第二百七拾八號　同　日
○太政官第百拾六號　九月十三日　海上衝突豫防副則中掲燈日限御改正　九丁

甲第二百七拾九號　同　日
當分舊山梨裁判所ニテ事務取扱云々　九丁

甲第二百八拾號　同廿一日
○太政官第百拾七號　九月十四日　違式註違條例中御改正　十丁

甲第二百八十一號　同廿二日
○太政官第百拾八號　九月十四日　地券書換証印税云々　十丁

甲第二百八拾二號　同廿七日
內國勸業博覽會出品上之御諭達　十丁

甲第二百八拾三號　同　日
○太政官第百拾九號　九月十五日　三重滋賀兩縣管下國界御定　十三丁

甲第二百八拾四號　同　日
○地租改正事務局甲第三號　九月十五日　市街地租額地租改正後五ヶ年間一定　十三丁

甲第二百八拾五號　同廿八日
○太政官第百廿二號　九月十二日　京都大坂兩府管下國界御定　十三丁

甲第二百八拾六號　同　日
○司法省甲第拾一號　九月十九日　代言人免許願狀差出期限　十四丁

甲第二百八拾七號　同　日
傳染馬疫豫防法疫馬取扱規則　十四丁

甲第二百八拾八號　同　日　ハガキ郵便御改正　十七丁
○太政官第百廿一號　九月十九日

甲第二百八十九號　同廿九日　釜石港浮標設置　十七丁
○工部省第十五號　九月十八日

甲第二百九拾號　同　日　山形縣下山形へ電線架設落成　十八丁
○工部省第十六號　九月二十一日

甲第二百九十一號　同　日　運轉手機關手試驗規則　十八丁
○太政官第八十二號　六月六日

甲第二百九拾二號　同　日　學區編入替　十九丁
○文部省第四號　九月二十一日

甲第二百九拾三號　同三十日　生糸賣買鑑札渡方規則中追加　十九丁

甲第二百九拾四號　同　日　火藥庫圍線規則御定　二十丁
○太政官第百二十號　九月十八日

乙号之部索引

乙第七拾七號　九月一日　徵兵令參考第拾七條中御改正　一丁
○陸軍省達第百三拾號　八月二十二日

乙第七拾八號　同六日　各村合併後戸籍調取扱方心得　二丁

乙第七拾九號　同七日　山林原野取調届出日限　二丁

乙第八拾號　同　日　民費稱呼御定　四丁

乙第八拾一號　同廿六日　下等小學和算教授法御施行　四丁
乙第八十二号　同十三日　佛國法教師入縣云々　十四丁
乙第八拾三号　同十四日　地券帳簿違算正訂　十五丁
乙第八十四号　同廿一日　出水に付流寄の材木物品取計方　十六丁
乙第八十五号　同廿三日　急破普請目論見帳差出方　十六丁
乙第八十六号　同廿五日　徴兵下調心得　十七丁
乙第八十七号　同廿九日　小學教則凡例中御改正　二十丁
乙第八十八号　同　日　氷害損地取調差出日限　廿一丁
乙第八十九号　同卅日　社寺籍取調差出日限　廿二丁
乙第九十号　同　日　官員巡村先休泊取扱心得　廿三丁
乙第九十一号　同　日　小學教則凡例中但書刪除の件　廿四丁
乙第九拾二号　同　日　小學調査表編成云々　廿四丁

明治九年九月 兩假名附 山梨縣御布達之寫

甲第二百七十一號　九月四日

社寺領上地處分の儀本年第六十六號公布の趣も有之候に付既に處分濟の分又は是迄伺出に對し及指令置候條件右公布に抵觸の分は更に可伺出旨當縣甲第百六十八號を以て及布達置候處今に何等不申出向も有之候はゝ本月卅日迄に可伺出且右上地の内處分未濟の分にて二十ケ年以上小作致來れる者及び所有の家屋有之分は其小作人或は家屋所有主の望に依相當代價を以て可拂下候條同日迄に願出づべし右期限中不申出に於ては期限後

何様苦情申立候共採用不致候此旨布達候事

甲第二百七十二號　同十三日

○太政官第百十三號　八月卅一日

海軍文武官等表別紙の通改正候條此旨布告候事

明治九年八月第百拾三號布告改正

海軍文武官官等表

等級	文官 本省	文官 本省	文官 裁判所	武官	武官	武官 海兵部	武官 軍樂科	武官 軍醫科	武官 秘書科	武官 主計科	武官 機關科
一等	卿			將官	大將						
二等	大輔			將官	中將						
三等	少輔			將官	少將			軍醫總監			
四等	大丞	技監	長	上長官	大佐			大醫監	大秘史	主計大監	機關大監
五等	權大丞	大匠司		上長官	中佐			中醫監	中秘史	主計中監	機關中監
六等	少丞	中匠司	評事	上長官	少佐			少醫監	少秘史	主計少監	機關少監
七等	權少丞	少匠司	權評事		大尉			大軍醫	大秘書	大主計	大機關士

等	六等	七等	八等	九等	十等	十一等	十二等	十三等	十四等	十五等
官	佐	大尉	中尉	少尉	准士官	下士				
丞	少丞	權少丞	大錄	權大錄	中錄	權中錄	少錄	權少錄	筆生	掌省
司	中匠司	少匠司	大師	中師	少師	一等工長	二等工長	三等工長	四等工長	五等工長
評事		權評事	大主理	中主理	少主理	一等書記	二等書記	三等書記	四等書記	五等書記
監	少醫監	大軍醫	中軍醫	少軍醫	軍醫副	樂長	樂次長	樂師	樂生	
史	少秘史	大秘書	中秘書	少秘書	秘書副					
監	主計少監	大主計	中主計	少主計	主計副					
監	機關少監	大機關士	中機關士	少機關士	機關士副	機關士補	火夫長	火夫次長	火夫長屬	
						曹長	軍曹	伍長	病室廚宰	看病夫長
							鼓長	鼓次長		
									艦內廚宰	艦內廚宰介
									艦內割烹	
					木工上長	木工長	木工次長	木工長屬		
								槇筋工長	槇筋工長屬	
								塗工長	塗工長屬	
								桶工長	桶工長	
							鍛冶長	鍛冶次長	鍛冶長屬	
								兵器工長	兵器工長屬	
							造綱長	造綱次長	造綱長屬	
							帆縫長	帆縫次長	帆縫長屬	
							信號長	信號次長	信號長屬	
							按針長	按針次長	按針長屬	
								檣樓長	檣樓長屬	
							甲板長	甲板次長	甲板長屬	
								大端舟長	小端舟長	
							指揮官端舟長	艦長端舟長	中端舟長	
								水兵長屬	水兵長屬	
					水兵上長	水兵長	水兵次長			
					掌砲上長	掌砲長	掌砲次長	掌砲長屬		
						一等筆記	二等筆記	三等筆記		
						艦內教授役	艦內教授役介			
						醫吏	醫吏補			

甲第二百七十三號　同十六日

○大藏省甲第十八號　九月八日

新公債幷に明治七年に發行の秩祿公債證書元金の儀發行條例の旨趣に遵ひ本年可拂戻金額新公債の分金四拾萬圓錢之數五拾九本秩祿公債の分も金四拾萬圓錢の數三拾二本各内貳本と當り籤と定め目今証書の所轄高最多き東京府へ八月三十一日主務の官員出張府下第一國立銀行第五國立銀行三井銀行爲換會社並澁澤榮一小室信夫田中平八等を始め証書所持高巨額なる者拾餘名を選び全國内証書所持人の總代とし一同の眼前に於て抽

籤施行候處即新公債第一抽の當り籤と印貳拾五圓(自三六至六壹壹)五百七拾六枚と印五拾圓(自貳〇四四至貳貳三八)百九拾五枚(自貳貳四九至貳貳五六)八枚(自貳貳六九六至二五六五)貳百九拾七枚と印百圓(自三〇六五至三五七五)九百拾壹枚(自三九壹壹至三九五壹)四拾壹枚と印三百圓(自三五七六至三七四五)百七拾枚(自三九五貳至三九六四)拾三枚と印五百圓(自三七四六至三七七壹)貳拾六枚(自三七七三至三八四七)七拾五枚此金貳拾萬圓同第貳抽の當籤ら印貳拾五圓(自三〇至二〇四三)貳千拾四枚(自三八四八至三八七六)貳拾九枚(自三九六五至三九九一)貳拾七枚ら印五拾圓(自貳〇四四至三〇六四)千貳拾壹枚(自三八七七至三九壹〇)三拾四枚ら印百圓(自三〇六五至三五七五)五百拾壹枚(自三九壹壹至三九五壹)四拾壹枚ら印三百圓(自三六九六至三七四五)五拾枚(自三九五貳至三九六四)拾三枚ら印五百圓(自三八〇六至三八四七)四拾貳枚ゐ印貳拾五圓(自壹至一六)拾六枚此金貳拾萬圓又秩祿公債第一抽の當ゑ籤い印貳拾五圓(自一至貳三六)貳百三拾六枚(自貳三八至五四一)三百四枚(自五四三至五四五)三枚(自五四八至六五〇)百三枚(自六五三至二四三三)千七百八拾壹枚ろ印貳拾五圓(自壹至八〇九)八百九枚い印五拾圓(自

二四三四至二六七九)貳百四拾六枚(自二六八壹至二七壹六)三拾六枚(自二七一八至三壹九三)四百七拾六枚(自三壹九五至三六四九)四百五拾五枚ろ印五拾圓(自二四三四至二四四八)拾五枚い印百圓(自三六五〇至四壹六六)五百拾七枚い印三百圓(自四二五八至四二七七)貳拾枚此金貳拾萬圓同第二抽の當り籤ぬ印貳拾五圓(自三二四至壹〇五五)七百三拾貳枚(自壹〇五七至壹壹六四)百八枚(自壹壹六六至壹三三四)百六拾九枚(自壹三四二至二四三三)千九拾貳枚の印貳拾五圓(自壹壹至壹壹三五)千百三拾五枚つ印五拾圓(自三壹〇六至三壹三三)貳拾八枚(自三壹三六至三二六七)百三拾貳枚(自三二六九至三六四九)三百八拾壹枚ね印五拾圓(自二四三四至三壹二〇)六百八拾七枚た印百圓(自三九〇七至四〇六九)百六拾三枚(自四〇七二至四〇七九)八枚(自四〇八壹至四二五七)百七十七枚れ印百圓(自三六五〇至三八〇〇)百五拾壹枚(自二八〇二至三八壹九)拾八枚に印三百圓(自四三二三至四三四二)貳拾枚此金貳拾萬圓に有之前書總代人より方法の公平正實なるとを保証し右確定候條此段可相心得就てゝ本月より可拂渡に付此番記号の証書所持のものゝ早々管廳へ可申出管廳に於ては該証書の番記号種類金高枚數人名共詳明調査

して合計表を製し元金受取方往返と除の外十日限當省へ可申出此旨布達候事

但し利息金の儀は當八月までを限り拂渡に付當り鐵の証書元金に對し去年四朱利割勘定を以利金合計表を各別冊に製し本文の合計表へ副て同時に可差出且

又此布達發表以後は當り鐵の証書更ゑ讓渡賣買の儀停止候事

甲第二百七拾四號　同日

○大藏省甲第拾九號九月八日

明治六年發行の金札引換記名公債証書元金の儀發行條例の旨趣ゑ遵ひ本年可拂戻金拾三萬二千六百圓鐵の數貳拾四本內貳本を當り鐵と定め八月三十一日當省中に於て証書所持人第一第四第五の國立銀行及び華族從五位吉川經健代人等の眼前にて抽鐵施行候處第一抽の當鐵い印五拾圓(自九壹三九至九四八四)三百四拾六枚い印百圓(自壹壹〇七七至壹壹四六)百七拾枚い印五百圓(自壹壹七八七至壹壹八一三)貳拾七枚い印千圓(自壹壹九四貳至壹一九五九)拾八枚此金六萬五千八百圓又第二抽の當り鐵い印五拾圓(自壹貳六五四至壹貳七壹壹)五拾八枚(自壹貳八一五至壹三壹四貳)三百貳拾八枚い印百圓(自壹

貳七九壹至壹貳七九四)四枚(自壹三壹四三至壹三三〇八)百六拾六枚い印五百圓(壹貳八〇七)壹枚(自壹三三〇九至壹三三三四)貳拾六枚い印千圓(自壹貳八壹貳至壹貳八壹四)三枚(自壹三三三五至壹三三四八)拾四枚此金六萬六千八百圓に有之右方法の公平正實あるとを保証相濟確定候條該債元利金の儀は當省より証書所持人へ直に拂渡すべく此旨布達候事

甲第二百七十五號　同十八日

○内務省甲第三十四號九月十一日

油眼月賣買被禁候以後取引取極の爲め延期の儀追々聞届置候向も有之處本年太政官第百五號公布の趣も有之候に付ては最前聞届候期限内の外自今一切延期不相成候尤更に營業致度向は右公布及當省甲第廿九號布達に照準可致此旨布達候事

甲第二百七十六號　同十九日

○太政官第百十四號九月十三日

今般府縣裁判所を改め地方裁判所を置き分轄左の通被定候條此旨布告候事

東京裁判所

東京府　千葉縣

京都裁判所　京都府　滋賀縣

大坂裁判所　大坂府　堺縣　和歌山縣

横濱裁判所　神奈川縣

函館裁判所　北海道　従前管轄内

神戸裁判所　兵庫縣　岡山縣

新潟裁判所　新潟縣

長崎裁判所　長崎縣　福岡縣

栃木裁判所　栃木縣　茨城縣

浦和裁判所　群馬縣　埼玉縣

青森裁判所　青森縣　秋田縣

一の關裁判所

岩手縣　宮城縣

米澤裁判所

山形縣　福島縣

靜岡裁判所

靜岡縣　山梨縣

松本裁判所

長野縣　岐阜縣

金澤裁判所

石川縣

名古屋裁判所

愛知縣　三重縣

松江裁判所

島根縣

松山裁判所

愛媛縣

高知裁判所

高知縣

岩國裁判所

山口縣　廣島縣

熊本裁判所

熊本縣　大分縣

鹿兒島裁判所

鹿兒島縣

甲第二百七十七號　同廿日

○太政官第百十五號　九月十三日

今般府縣裁判所ト改メ地方裁判所ヲ置候ニ付各上等裁判所分轄左の通り相定候條此旨布告候事

東京上等裁判所

東京裁判所　横濱裁判所

浦和裁判所　静岡裁判所　松本裁判所

大坂上等裁判所

大坂裁判所　金澤裁判所　高知裁判所　岩國裁判所

一の關裁判所

栃木裁判所

愛知裁判所

新潟裁判所

京都裁判所

神戸裁判所

松山裁判所

松江裁判所

宮城上等裁判所

青森裁判所

米澤裁判所　函館裁判所
長崎上等裁判所
長崎裁判所　熊本裁判所
鹿兒島裁判所

甲第二百七十八號　同日

○太政官第百拾六號九月十三日

本年二月第拾一號布告海上衝突豫防副則中掲燈の儀明治十年一月一日を明治十一年一月一日と改正候條此旨布告候事

甲第二百七十九號　同日

本年九月第百拾四號當縣甲第二百七拾六號を以公布の通地方裁判所と被置候に付ては本縣の儀靜岡裁判所所轄に屬し候得共追て何分の達有之迄は從前の通り舊山梨裁判所に於て事務取扱相成候條此旨布達候事

甲第二百八十號　同廿一日

○太政官第百十七號九月十四日

東京並に各地方違式註違條例中第三條左の通改正候條此旨布告候事

第三條　違式註違の罪を犯し無力の者質決そる左の如

一違式　懲役　八日より少なのらず十五日より多からず

一註違　拘留　半日より少あからず七日より多からず

但し拘留の罪と雖も適宜懲役に換もることあるべし

甲第二百八十一號　同廿二日

○太政官第百十八號　九月十四日

地券書換証印税の儀地租政正の後は時々の賣買地價に不拘五ヶ年間据置候地價に據り証印税收入候條此旨布告候事

甲第二百八十二号　同廿七日

來る明治十年東京府下上野公園内に於て内國勧業博覧會興行の儀に付ては本年甲第二百六十三號を以て及布達候處右は此般同年八月廿一日開會同十一月卅日閉會と改正相成候抑此會御開設相成候儀は各地の産物を一場に湊集し其優劣を比較し物質の真否と工藝の巧拙を評し以て商業の便路を開き後來内地の物産として隆盛の域に達せしめんとの御注意にて古來未曾有れ盛會なを天造人工を論せず渾て所産の物品は其一種一品に充分盡力し大よ其伎倆を示し其他一般れ需用に便利なると可成無洩差出候樣可致尤も出品志願之者若資金の不充分等より其意と達せざる等の情實有之者へは一時

資本の不足を貸與へ或は其品買揚候儀も可有之候條其事由並に出品の種類等據て各區事務所へ相渡置候出品槩目錄表式通相認來る十月三十一日迄に勸業場へ可申出候此旨布達候事

乙號表式凡例

此表は自費を以て出品する者を取調べきもの

物名　此區は金鑛又は陶器花瓶蒔畫文庫等の如き各箇れ物名と記載する所

概數　此區は物品の數を稱するもの、概畧を記載そる所

槩尺量　此區は寸尺を稱そる物及び量目を稱そる物等其物品に因りて槩尺量を分記そる所

但疊ハ礦石の如きは前區に塊數を記し此區に各塊の斤量を載すべし

製　此區は陶器花瓶なれは染付か錦出織物なれは編か或と摸樣等總て其物品の製工を記載する所

但動物は種類毛色年齢と記そべし

產地　此區は物品產出の地名と記そ

凡原價　此區は出品人の申出し金高を記載そる所

乙

用紙 美濃紙 堅貳ッ折

住所
出品人　此區は宿所並人名又は社名と記す

何府縣下自製出品表

物名	製數	製尺量	製産地	凡原價	所住出品人

凡原價總計金

甲第二百八十三號　同廿七日

○太政官第百十九號九月十五日

三重縣管下伊賀國阿拜郡上柘植村と滋賀縣管下近江國甲賀郡五反田村とへ係る國界字餘野植切一本松より字ゾロ〳〵峠に至るの間不明瞭の場所今般更に國界相定總反別百四十町九畝二十四歩の内百三十四町五畝十歩は伊賀國上柘植村へ屬し六町四畝十四歩は近江國五反田村へ屬し候條此旨布達候事

甲第二百八十四號　同　日

○地租改正事務局甲第三號九月十五日

市街地地租之儀に付明治八年八月第百三十三號と以公布有之候に付ては市街地一般明治六年七月第二百七十二號及其以後地租改正ゐ關したる諸布告に可準據儀に付改正後賣買の間地價の增減を生ず候共改正の年より五ヶ年間は最初取定候地價に據り收稅候儀と可相心得此旨布達候事

甲第二百八十五號　同廿八日

○太政官第百二十二號九月廿日

京都府管下丹波國桑田郡土ヶ畑村と大坂府管下攝津國能勢郡宿野大里柏原三ヶ村とに係る國界地字南ヶ嶽より字丑道ノ上東タワノ上に至るの間舊來不明瞭の場所山反別六十九町二畝二十六歩六厘の地自今丹波國へ屬し候條此旨布告候事

甲第二百八十六號　同日

○司法省甲第十一號九月十九日

當省本年甲第一號布達第五條但し書一年とは月數を通算ス十二ヶ月を以て期とし則免許狀に登記せ之月より起算す

代言人免許願狀本年は來十月限其管轄廳へ差出すべし

來十年よりは一年兩次三月九月と定む此の限月に非ざれは

出願を許さゞ

但し已に免許狀を與たる代言人にして期限後引續き其職務を行はんことを望むものは本文兩月内に豫め願狀を地方廳へ差出すべし

右布達候事

甲第二百八十七号　　同日

方今勸業寮所轄駒場野並内地處々より於て傳染馬疫流行の趣報知有之右は最も危險の病症にて萬一各地方に蔓延するに至ては大に農業並運輸の妨害を釀ち實以て不容易義に付別紙疫場取扱規則並豫防法共相達候條各自〳〵畜養の者は兼て豫防行屆候樣注意可致此旨布達候事

疫馬取扱規則

第一條

各自飼立の馬左に掲ぐる疫病の徵候あるときは本年甲第九十九號達疫牛取扱規則第二條に掲載する醫員より診察と乞ひ全く疫馬に相違無きに於ては直に區戸長に屆出區戸長よりは最寄巡査屯所並に縣廳へ屆出づべし

但し醫員懸隔の地等にて之を迎ふるの際全く傳染疫病の徵候發現するときは直に區戸長へ屆出づべし

一惡寒沉鬱体温元進暫時にして牝馬は乳部、牡馬は陰囊

の近傍或は胸部腹部等に腫物と發し呼吸促迫熱度甚だ
く流汗灌ぐが如きもの
一四肢萎憊脈脇微細となり俄然として腹部に劇痛を起
さ其痛所を回顧し又後肢を以て屢々地上を打つ者
一患病の前後食欲は著しく減省せざる者とす

第貳條

區戸長より屆出次第官員或は巡査派出之を檢査すべし

第三條

疫病の爲め斃死したる馬の遺骸は毛皮の儘即日燒棄す
るか又は六尺の地中に埋沒す可し

第四條

疫病にて斃れたる廐舎の内斃馬に接着せし土壌並に藁
藁等は盡く硫黄を散布して燒棄するか又は埋沒す可し

第五條

疫病と取扱ふ者は一週間は健馬に近づき且他の健馬の
廐舎に入る可からず
但し他の毛獸と雖ども之に接近するを禁ず

環防法

一馬疫の徵候あると認むるときは速に其由を近隣に通
知し健馬を所持するものは互に相往來出入するを禁

去健馬は成丈大氣流通そる高燥の地に移ー毎日適宜に運動せしめ且相當の業に就去むべし、

一疫馬の徴候あるとき之別に廐舍を設け之を移ー豫め左の藥劑を施そ可し

（硫酸）七公五厘

（八十五度火酒）貳匁貳分五厘右二種を混合して（硫酸規尼涅）七分五厘（水）壹升五合を加へ一日三四回ゑ分服せーめ左の甲乙の飲劑を毎一時に交換兼用そ可し

一（甲）（醫用純石炭酸）貳分五厘（火酒）適宜（水）二合五勺に溶解去たる者

一（乙）（醋酸暗母尼亞）壹匁貳分五厘（水）五合に溶解したるもの

又甲の（石炭酸）劑に水多量を加へ毎一時灌腸去（芫菁丁幾）を以て腫部に塗布そ可ー

一兼て廐舍は清淨ゑ去て寢藁等は毎に取替濕氣を乾ー大氣の流通を能すべー

甲第二百八十八號　同廿八日

○太政官第百廿一號九月十九日

郵便はがき半錢を五厘と改一錢共左の見本の通改正候

條此旨布告候事

但當分從前のはがき取交相用不苦候事

甲第二百八十九號　同廿九日

○工部省第十五號九月十八日

今般陸中國釜石港に於て左の位置形狀の通二箇の浮標設置候條此旨布達候事

明治九年西暦千八百七十六年第五號

釜石港浮標

一日本政府布告を釜石港の岩礁の位置を示す爲め浮標を設置す

一該港の中央に近き處南北に對列して二箇の岩礁あり其距離凡二百尺にして退潮のとき北方の岩礁は水の深さ一尋南方の岩礁い二尺なり

一北方岩礁の位置は黑色浮標と以て標示す但し右浮標は該礁の北方退潮のとき水の深さ十一尋の所に浮置を南方岩礁は赤色浮標にして其南方同玄く水の深さ十尋の所に浮置す

一浮標い兩個共頂に球形の籠を載置を其高さ水面より八尺五寸なり

一船舶は黑色浮標の北方か又は赤色浮標の南方を通航

すべし兩個浮標の間に通路なし

一現今南方に散置せる赤色浮標は假浮標に付退て改置の節は更に布達そべし

甲第二百九十號　同日

○工部省第十六號　九月廿一日

本年八月第十四號を以て及布達候山形縣下山形への電線今般架設落成に付同所へ分局設置來る十月一日より爲試通信取扱候條此旨布達候事

但し音信料の儀は第十四號布達の通可相心得事

甲第二百九十一號　同日

西洋形商船船長運轉手機關手試驗規則の儀左の通公布相成右技術試驗の儀來る十月四日第一水曜日を以試驗場開設爾後毎月第一第三水曜日を試驗日と被定候趣驛遞寮より通知有之候に付受驗志願の者は規則書熟覽致之右定日一日前姓名履歷等を記したる願書を以て驛遞寮へ可願出此旨布達候事

但し試驗規則は區長總代理へ達置候條可承合事

太政官第八十二號　六月六日

西洋形商船船長運轉手機關手試驗規則別冊の通相定候條此旨布告候事

但し試驗所其他詳細の儀は受驗志願の者より直ふ驛遞寮へ可伺出事

甲第二百九十二號　同　日

○文部省より回號九月廿一日

鶴ケ岡置賜兩縣被廢山形縣へ合併相成候に付今般山形縣と更に第六大學區に編入候條此旨布達候事

甲第二百九十三號　同三十日

明治六年五月第百拾壹號を以て生絲賣買鑑札渡方規則相達置候處今般左の通追加相成候旨內務省より達有之候條營業の者は鑑札受取方可申出此旨布達候事

第拾條

一玉絲繭斗絲屑絲皮ムキ絲は勿論繭眞綿出殼繭山繭等賣買渡世の者と雖も生絲賣買鑑札提携可致事

甲第二百九十四號　同　日

○太政官第百廿號九月十八日

火藥庫圈線規則別紙の通相定候條此旨布告候事

火藥庫圈線規則

第一條　火藥庫周圍近接の地を分て二圈とし火害を豫防するゐと左の如し

第一圈　火藥庫牆壁外拾四間以內の地に於て諸種の

建物を設け材木草秣其他總て燃質物と蓄積するとを禁ず

第二圖　火藥庫牆壁外廿八間以内の地に於て、火を取扱ふ建物を設け瓦斯の傳送管を施さ及ひ發火質の物品を蓄積するとを禁ず

第二條　全國火藥庫所在の地名

第一項陸軍省所轄の火藥庫左の如し

砲兵第一方面

軍管	使府縣	國	郡	區	所名	番地
第一	東京	武藏	荏原	第八大區一小區	青山千駄ヶ谷町一丁目	二拾番二拾六番
仝	〃	〃	多摩	第八大區六小區	和泉新田	千〇二十六番
仝	〃	〃	豐島	第九大區六小區	赤羽村	百番
第三	石川	加賀	河北	第拾五大區三小區	田上村	拾二字ヲノ部八番ノ甲
仝	〃	〃	石川	第三大區七小區	上野新村丙壹ノ甲牛坂村ソ七拾五ノ甲	
仝	〃	〃	第三大區五小區	野田村野泉村ホ三百九拾五カ壹ノ甲		
第四	京都	山城	宇治	第二大區	五ヶ庄村	百五十四番
仝	相歌山	紀伊	海部	第二大區四小區	盛屋村	貳百二十貳番
仝	〃	〃	〃	〃	同村字甲崎	二百九番
仝	〃	〃	〃	〃	關戸村字小谷	七百四拾壹番

仝	滋賀	近江	犬上	第二區	松原村	番外
第六	鹿兒島	薩摩	鹿兒島	第三大區小區	坂元村ノ内奥ノ原	貳百三拾四番
仝	、	、	、	第二大區七小區	西別府村ノ内大牧	二百七拾七番
仝	、	、	、	第一大區八小區	大追村	七拾貳番
仝	、	、	、	第一大區四小區	草牟田村ノ内	百五拾四番

第二項海軍省所轄ノ火藥庫左ノ如シ

東京	武藏	荏原	第七大區一小區	白金臺町二町目	貳拾四番
仝	、	、	、	目黑三田村	拾五番
長崎	肥前	彼杵	第一大區十一小區	稻佐鄕平戸小屋村	百拾三番
鹿兒島	薩摩	鹿兒島	第三大區八小區	吉田村	無
仝	大隅	噌唹	第六十一大區三小區	敷根麓村	三番

第三項開拓使所轄ノ火藥庫左ノ如シ

開拓使	石狩	札幌		圓山村	五拾番
仝	渡島	龜田		千代个臺	番號未附

乙第七十七號　九月一日

各區
正副區長
同戸長

徴兵令參考第十七條中左の通改正相成候條此旨相達候事

○陸軍省達第百三十號　八月廿二日

徴兵令參考第十七條中第二式年齢計算表別表の通改正候條此旨相達候事

但し安政三丙辰年二月十六日より同月末日迄出生之者は來明治十年徴募に令應候儀と可相心得候事

〔別表〕

徴兵令参考

第二式　年齢計算表

但此表明治十年を以て標目となす

誕生の年月	明治九年一月	明治十年一月に至り年月計算
安政三辰年 三月	十九年十一ケ月	二十年十一ケ月
四月	同十ケ月	同十ケ月
五月	同九ケ月	同九ケ月
六月	同八ケ月	同八ケ月
七月	同七ケ月	同七ケ月
八月	同六ケ月	同六ケ月
九月	同五ケ月	同五ケ月
十月	同四ケ月	同四ケ月
十一月	同三ケ月	同三ケ月
十二月	同二ケ月	同二ケ月
同四正月	同一ケ月	同一ケ月
已年二月	十九年	二十年

徴兵連名簿記載の者

明治十年徴募そべき者

乙第七拾八號　同六日

各區

正副區長

同戸長

戸籍の改正は壬申年の取調に原據之改訂校正を加候迄の儀に付同年後合併相成候村々は舊村限爲取調候得共一體戸籍の取扱は舊村の區別を不論合併の一村正副戸長合同可取扱は勿論の儀に候條爲心得此旨相達候事

乙第七十九號　同七日

各區

山林原野調査の儀兼て相達候に付ては既に取調差出候向も有之候處高内外を混し取調有之且未た不差出向も有之不日丈量着手の筈に付ては差支不少候間更に順序左の通相心得別紙雛形に照準詳細取調地引絵圖面相添本月廿五日限無遲滯可差出此旨相達候事

一高外山林原野大畧耕地丈量の手續に據り一筆限りの區別あるものは其筆限耕地同様丈量之一字限り區別のみあるものは其字限丈量すべき事

正副區長
同　戸長

一山岳は斜面側面にて縱横の間數を量り反別を算出べし深山幽谷或は柴草山等手廣の地にして容易に丈量なし難き地は差向き四至の境界を詳記し周圍の里程と量り凡その反別を取調ふべき事

山林原野一筆限帳

字番號

一此番號は先般差出有之一筆帳の番號を記載べし

長横間數	芝地反別	姓名印
〃	〃	持主未定の分は何社寺上知官有地と記載の事
〃	〃	
一〃	竹林反別	同

一　仝　萱生地反別　同
仝　仝
一　仝　草生地反別　同
仝　仝
一　仝　林反別　同

是は一筆限り區別あるもの其他地目の換りあらは記載そべし

字
番號　前同斷
一　反別　前同斷　東西　南北　間數　姓名　村　持　歟
但雜木種何
仝　仝
一　柴山反別　同
仝　仝　同

一　草山反別　同
仝　仝

是は一と字限り區別のことあるもの

字
番號　前同斷
一　林凡反別　東西　南北　境界と可記
仝　仝
一　山凡反別　同

是は周圍の里程を量て凡反別と算出すべし

乙第八十號　（同　日　各區　正副區長　同　戸長

民費の稱呼左之通相定候條自今公文書にも必ず此稱呼相用ひ可申此旨相達候事

縣費

管内一般に賦課する民費の物稱とす

區費

一區或は二三區内に賦課そる民費の物稱とす

町村費

一町村或は二三町村内より賦課する民費の物稱とす

乙第八十一號　　同廿六日　　各區

今般下等小學和算教授法別冊の通り編輯候條本月より四級生徒以上據科相設施行可致此旨相達候事

學區取締
學校訓導
學校事務掛

下等小學和算授業法

一和算を授くるは洋算と隔日とす

一洋算は毎級之を授くるを以て和算を授くるの際一々洋算に就て其理と說示そべし

一加法減法等毎級洋算を以て通熟そべきと雖も算盤に

向ては其脊梁上下れ珠顆固有の數理は勿論指端屈伸の法と雖も敢て知る能はす故に教師一々此等の法を説くを要す

指端屈伸は乃ち右手れ食指を伸へ餘の四指と屈去人指中指の前に置き之と相倚ら去むるを云ふ

一始業の時及び一算を畢る毎に必す令去して一同一齊に珠顆を整は去むべ去(玉を拂ふて)の令を聞き生徒兩手と以て算盤の左右を取て傾欹して梁下れ顆を整へ直ちに故位に復し右手の指端を以て梁上珠顆の下を拂は去む

○第六級

第一　數目

左の如き數を塗板に記し先づ一二名を去て之と讀ま

しめ然る後一場同音に朗誦せしむ大數は兆位小數は忽位を限りとす此等は務めて諳誦せしむべ去

基數　一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

大數　一、十、百、千、萬、億、兆、京、垓、秭、穰、溝、正、載、

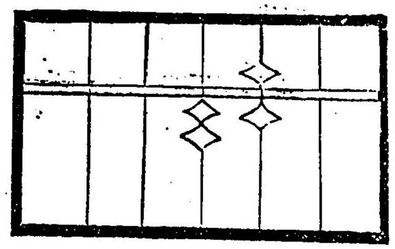
小數　分、厘、毫、絲、忽、微、纖、沙、塵、埃、渺、漠、

第二　列法

教師大盤に向ひ生徒を去我指端に注目せしめ梁上の

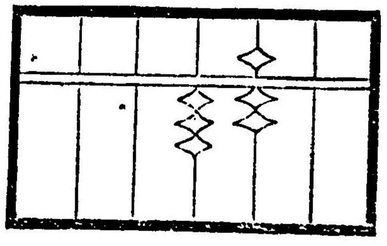
一顆は五个にメ梁下の一顆は乃一个なり故に梁下の五顆と梁上の一顆乃十个なり是以て一位と進め十位ゑ一顆を置く等を示すべき此際梁面の圏符は一位の上、と十位其上は百位なるとを説くを要す但大數は命位ゐ至りて授く粗其意を解そるゐ至りて問題を盤上に設け一二生を指ゑて答へしめ之を塗板に書して衆生ゑ正否を質し正ゑ々れと嚮に板面に書そる者を拭ひ大盤に向て同誦せしむ其問題を設くる法左の如し

假令ば



此數如何

答廿六



此數如何

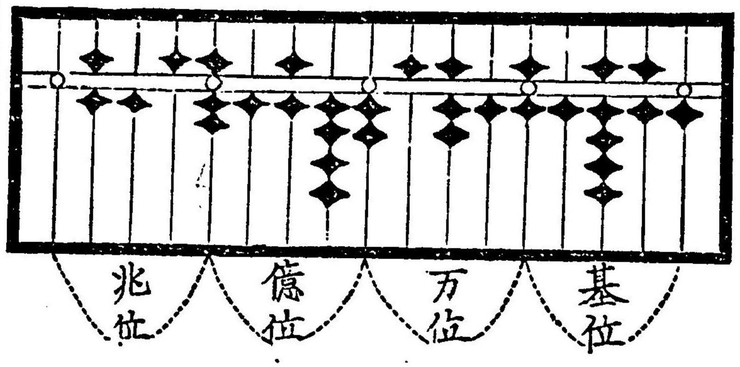
答卅七

右の法熟そるに至りては百位以内の數を口誦して之を算せしめ之に答ふるもの或は他生に珠顆の位置を問ひ之を大盤に列し照準せしむ

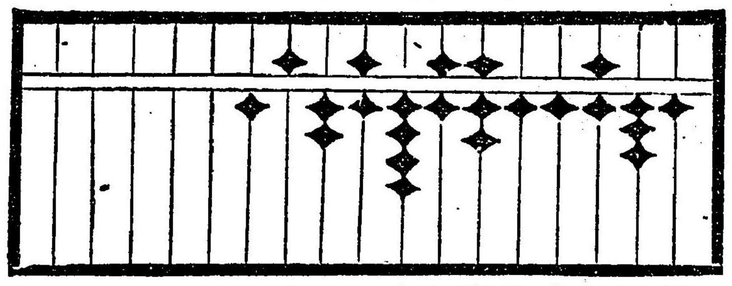
第三　命位

圖の如く數を大盤に列ね去大數は四桁毎に名を異ゝ去小數は單位以下の數と命そるものに去て其一位を退く毎に名を異にするを詳説し後新に其數を列置し一二名に問ひ再び大盤に向て誦せしむ稍頭解そるに至て其數と口誦去算せーむる前に同ド

大數命位



小數命位



第四　諸物名義

數を盤上ゝ列ーー米粟布帛貫匁等の義を説べし

假令ば米粟は何石何斗何升に去て布帛は何丈何尺何寸あり故ゝ米粟の石を以て基位となすときは布帛にゝつては丈を基位とゝそべし稍其理を領解そるゝ至り敎師其數を口誦しく之を算せ去め其答數を求む

○第五級

第一　加法

加法の理（一ゟ二を加れは三となる）は既ゐ洋算ゐ於て知ると得故に只算顆の運用（脊梁上下の珠顆を一時に用ふるときは必ず先つ梁上の一顆を下し次に梁下の珠を上ぐるを云ふ）並に加珠の法（五と云へば梁上の一个を脊に附き次に三と云へば梁下の三个と上ぐ八个とゐる等を云ふ）を説き而後教師容易の數を口誦して大盤に加へ示すべし畧其理を覺ふれば數を口誦ずして算せしめて其答數を求め其稍熟するに至りてと問題を與へ或ゑ口誦して許多の數累加せしむ

第二　減法

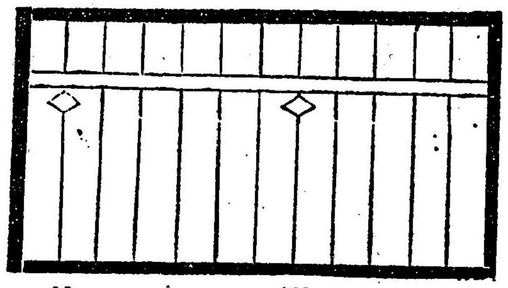
減法の理（二より一を減ずるを一とゐる）亦既に洋算に於て知ると得故に只算顆の運用（脊梁上下の數を一時に用ふるときは必ず先梁下れ珠顆を拂ひ次に梁上れ一顆を拂ふ）並に減珠の法（九より五と減ずてと云へば梁上の一顆を拂ひ次に四を減してと云へば梁下の四顆と拂ひ靈となゑ又九より四と減ずてと云へば梁下の四顆を拂ひ次に五を減してと云へば梁上の一顆を拂ひ亦靈とゐり又十よゑ九を減ずてと云へゑ其一顆

を拂ひ下位梁下の一顆を上げて一个となる)を說き而後教師容易の數を口誦して大盤よ就き減法を示さ可き口誦さて算せしめ問題と與ふる等授法前に同ト加法減法皆既に熟するの後加減相混するの數を口誦さ或は問題を以て倘通熟せしむべし

○第四級

第一　乘法算顆運用

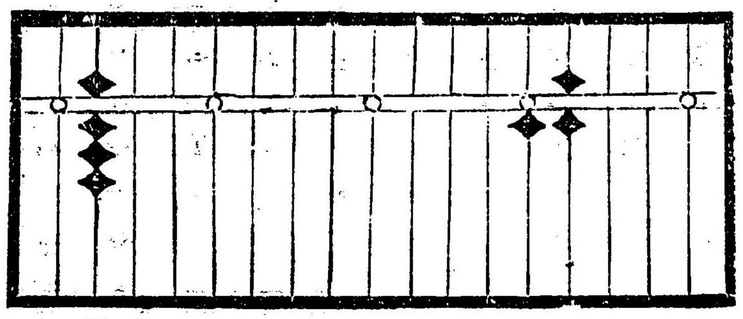
算顆運用は乘算九々に就て之を教ふべし教師先づ大盤に面さて圖の如く法數一个を上げ是其乘すべき數あるとと說き次ゐ亦實數一个を上げ原數



一なるとを示さ而後一誦さて(一一か一と云ふ)實數一个を下位に下さ隨て生徒を さて一齊同誦せしめ一よ一を乘して乃亦一なるとを說く畧其運を覺ふるに至らば數を口誦して算せさめ其答數を求め照準さて衆生に示さ此れ如く一より九に至の九々を反復熟習せしむ

第二　定位

定位の法則(法實兩數同位の下單位となると一より千百の數に及ぶも必ず同一なる)を



説き而る後盤面に就き左圖の如く實數は基位千の處を單位となせば此梁脊に附せし顆數は十六なり又法數兆位千の處を單位とすれば此梁脊に附せし數は八なり今此八を以て實數十六に乘するには先法實兩數同位桁即ち甲々と見而後相乘の後之基位百の處乃ち單位となると示す冪其理を覺ふるに至らゞ預め法實某の處を單位と定め其數を口誦して之を各自の盤上に擺置せしめ相乘せし後の單位を問ひ相照準せしめ冪熟するに至らゞ單位以下の數位等をも知らしむべし

〇第三級

第一　乘法

算顆運用及び定位等前級に於て熟そるものあり故に數を口誦して之を算せしめ或は數を直ちに大盤に列し又は問題を與へて其答數を求む其既に熟そるに至らゞ單位以下の小數をも授くる等凡て前級の如き

第二　除算九々

除算九々は該級に於ては單に暗誦せしむるのみ其義解に至りては後級の除法に就て之を授くべし但授方は加算九々圖及び乘算九々圖の如し

○第二級

第一　除法算顆運用

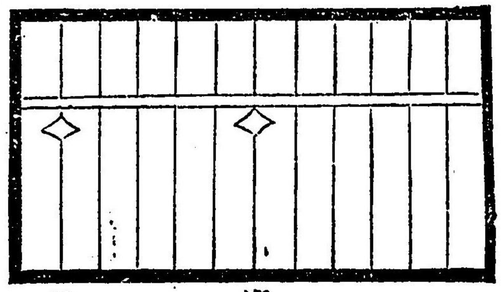
算顆運用は先づ九々圖中の數より就て之を授くべし且此際九々の義解をも教ふべき

九々の義解とは假令ば一進一十とは物數一を一にて除すれば乃一なり二を二にて除するも亦一となる故に之を左桁に進ゝ十となすなり一進一十より九進一十に至るまで其理皆同ぢ二一添作五とは物數十を二除それは乃五なる故に一に四を添へて五となすなり四二添作五六三添作五八四添作五等其理皆同ト三一三十一とい其一と一位右桁に換置せば顆數十なり是を除して九進三十となせば原の一顆は三となり且右桁より一顆を除すを以て三一は則ち三十一となるなり其他三二六十二より八七八十六等に至るまで亦其理皆同ぢ五一加一とい實數一个を一位右桁に下だせば顆數十となり是と二回除ぢて五進一十とせば原の一

に變せ故ゑ五一は一を加へて二に作るべきなり五三は二加三五四加四等皆同玄六一下加四とは實數一個を一位右桁に移せ乞顆數十となる是を除して六進一十とおせば原の一個の外尚右桁ゑ四個を剩そ故に六一は下桁に四を加ふべきなり九八下加八等其理皆同玄又見一無頭作九一とは實首數一個を法首數一個にて除して一進一十とおせば商數一個を得べし然れども此一個と法次數とを照準して九々にて呼ひ實數中より減そるに其數足らざるときは此數は商一個を得ざるものゑり此際用ふる語なり假令乞實數一個を一位右桁に移せ乞乃十個となる是を除して九進九十とせ乞原一個の數は九個となる尚右桁に一個を殘すべ玄故に實數一個を九一ゐなすべきなり見九無頭作九々に至るまで皆同玄又歸一倍一とは既に其數を除去て而る後減數の足らざるとき其商數中の一個を原の桁ゑ還して一倍とゐそなり歸一倍九ゑ至るまで亦皆同じ

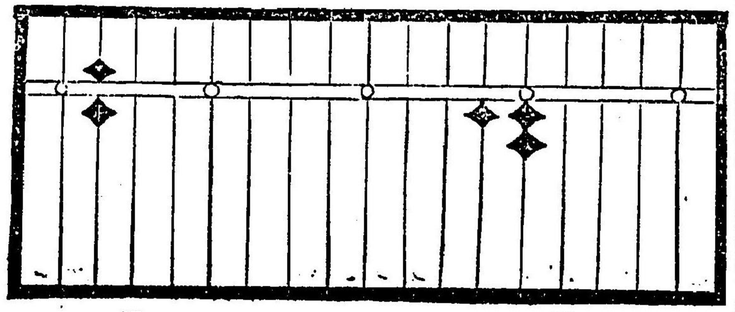
教師先づ大盤に向ひ法數一個を上げ是其除すべき數ゐることを說き次に亦實數一個を上げ原數なることを敎へ而後一誦一て(一進一十)實數一を左桁に上げ隨て生

徒をして一齊同誦せしめ一を一にて除し乃ち亦一なると說く畧其理を領解せば數を口誦して之を算去相照準せしむ此の如く一より九に至るの九々を反復熟習せしむる等其授方は前級乘法に於るがおとし



第二　定位

定位の法則法實兩數同位の上一位（乃單位となるは一より千百の數に及ぶも必ず同一なり）を說き而後盤上に就き左圖の如く實數は基位千の處を單位とるさば此梁脊ゐ附せし課數は百二十あり又法數は兆位千の處を單位となせバ此梁脊に附せー數は六なり今此六を以て實數を除するには必ず先づ法實兩數同位の桁乃甲々と見而る後除そるの後は基位萬の處乃單位とるべきを示そ等授方前級のおとし



第三　除法

算課運用及び定位等既に熟するの後其授方順席は凡て前級乗法に於るごのおとし

乙第八十二号　同十三日

各區

正副區長

同　戸長

各宗教導取締並に教導職へ別紙の通相達候條區戸長於ても兼て相心得居佛國人相越候節ゝ無不都合樣可取計此旨相達候事

各宗

教導取締

教導職

佛國法教師エ――ミ――ルギメ氏及び畫工レガメ氏今般同國文部卿の命を受我國佛教の景況見聞の爲東海道通り富士山及び其近傍を巡り大坂迄で旅行可致に付右沿道にある寺院へ相越法教の質問及び寺觀の摸樣等摸寫の儀申出候はゝ無不都合樣可取計旨内務省より達有之候條豫て相心得居當縣下へ罷越候節は夫々取計方注意可致此旨相達候事

乙第八十三號　同十四日

各區
正副區長
同戸長

最前相達候地券一筆限り帳の儀綿密に取調候は勿論ゑて聊違算等は無之筈に候處實地丈量及び其他共檢査相濟追々地價割合方に至り間繩呼違或は縱横掛違又は畝歩の重複等より些少反別增減を生ト帳簿引直し方申出る向も間々有之畢竟村吏及び算者の不注意にて甚不都合に候得共右異算の如きは詮議の上此度限り正訂爲致

候條本月廿五日限り可申出候右日限後申出ると雖ども一切不致採用候條此旨相達候事

乙第八十四号　同廿一日

各區
正副區長
同戸長

此般出水に付所々へ流を寄り候材木其他物品假令各自引揚候分たり共自用ゑ供ゑ或は自宅に持運び候儀は一切不相成候條所有主判然相分り候分は引渡一受取書取置其餘は各村に於て取纏め置處分ゑ區戸長連署を以て

追て可伺出此旨相達候事

乙第八拾五號　　同廿三日

各區

正副區長
同　戸長
土木掛

本月十七日以降出水に付破損の箇所急破普請を要する目論見帳差出方の儀山梨八代巨摩三郡は本年六月布達各區土木掛職制第七條に依り其區土木掛都留郡は區長に於て兼限り突合せ確實精調の上取纒與書を以て本月三十日限り第三課土木掛へ可差出此旨更ゑ相達候事

乙第八拾六號　　同廿五日

各區

正副區長
同　戸長

例年徴兵令下調の事務は徴兵令並に徴兵令參考等掲載の條目に因り可取調者勿論に候得共其順序運方區々相成候ては不都合に付本年より左の條目に照準し取調粗漏又は遲緩に流れざる樣厚く注意可致此旨相達候事

徴兵下調心得

第一條　徴兵の年齢は徴兵令第六章第十三條並に參考第十七條記載の通徴募の本年即徴兵下調の翌年二月滿二十歳以上廿一歳未滿に當るものを撰拔すべき筈に付下調の年より逆算して廿二年前れ三月一日より廿一年前れ二月三十日迄に出生の者を徴兵年齢相當とす

但し本年の下調に限り廿二年前即安政二乙卯年二月十六日より同月三十日迄出生の者を加入すべし

第二條　徴兵令第六章第十三條中記載の通翌年徴兵相當の者は其戸主より十一月十日迄に戸長へ可申出筈に候得共戸長に於ては兼て戸籍に就て本籍の者と寄留戸とを不論年齢相當の者を檢出し徴募に可應者と免役相當の者とを不問總人員を取調下調帳を製して連名に記載し置き成丁免役兩簿を製する原本に供すべし

但し徴兵令第三章免役概則中第一條第二條第十條を除くの外は下調帳を製する節既に適當の者判然たるに付各自の頭書又其趣旨記載すべし

第三條　身幹の尺度は一村限り可取調筈に候得共長短分厘の差誤より兵役免否の關渉を生ずるに付上下の嫌疑無からん爲め各區一般十月十五日を以て定日とし一區内の兵丁を區長事務取扱ひ所へ喚集し午前十

時より午後三時迄の間毎村戸長列席區長立會の上毎丁の尺度を檢し徴兵令參考第十八條の通り四尺九寸未滿の者は下調帳本人頭書へ其旨と記して免役の部に屬ス四尺九寸以上を成丁とすべし

但ス同日は掛官員或は其聯區内在勤の警部巡査等臨時區務所に至り下調の景況及び關係の諸帳簿等を檢視するとあるべし

第四條　徴兵令第三章中第二條第十條免役に當る者と兼て其戸主並に親屬隣保等より詳細申出可有之は勿論に候得共猶平生の實際に就て其事情取糺置無相違者と見認るとは前條全區々戸長參列の席ゟ於て猶衆議を請ひ免役に屬すべ〻者と議決そる上は下調帳本人の頭書に其旨を記して免役の部に屬し且別紙に其事由を詳記して區長以下証印の上他日進達の免役簿に添て差出そべ〻ス

第五條　第二條以下の手續を以下調帳出來の上は區長の檢印と請ひ然して後各村へ持歸り本簿の編製に取懸るべ〻

第六條　分籍又は養子等の事故を以免役申立る者有之とも下調に取懸らざる以前既ゟ成規の手續を經て届

出戸籍へ登記濟の者の外は一切取上ぐべからず難止事情有之分は詳細具申して決を乞ふべし

但宿病並父兄宿病にて家事を代理する者の如きは醫師の容體書を添ふべき

第七條　徵兵相當の者にて管内外へ寄留する者あらば下調前呼戻し身幹等檢査の上第三條の通取計ふべし若し管外遠隔の地へ至急難喚戻者は身幹定寸以上の者と見做し連名簿に記載し置き徵兵令第六章第十三章の通翌年一月中迄に無相違喚戻そべき尤も全戸管外へ寄留の者は同章第十四條の通寄留地に於て徵募に應ぜべき筈に付呼戻そに不及と雖ども猶徵兵令參考第廿七條の通連名簿附錄に其姓名並に事由を記して差出そべし

第八條　第二條より第五條迄の手續を以て徵兵連名簿免役連名簿兩種の帳簿を製し清書濟區長へ差出候上は謬誤等無之さめ區長に於て猶丁寧校合し徵兵令第六章第十三條の日限即十一月卅一日迄に無相違差出すべし

但し連名簿は區村の野紙免役簿と兼て區長總代理より下渡したる免役簿野紙へ記載する者とす書式

は徴兵令參考第十七條ゟ準すべし

第九條　國民軍名簿も前條同期ゟ差出そべきに付兼て戸籍を按し其姓名を書抜き置き各戸主の申出に突合せ〻精密取調ぶべし

乙第八十七號　同廿九日

各區
學區取締
學校事務掛
學校教員

小學教則凡例第一條中左の通り改正候條此旨相達候事

小學教則凡例

第一小學課程を大別して上下二等とす下等へ滿六歳より滿十歳に止り上等は滿十一歳より滿十四年に終り上下合せて在學八年とす

乙第八十八號　同日

各區
正副區長
同戸長

本月十七日以降の水害に付ては明治七年乙第八十四號達の通追て水害表製調可差出筈には候得共差向檢査の

都合る有之候條損害の耕地一筆限り反別番號字所有主姓名○損地の厚薄等別紙雛形に照準精密取調每區取纏め來る十月十日迄ゟ可差出此旨相達候事

損地調書

郡區
村名

一田反別
内
第一等損害
合反別
此譯
字番號
田反別

川欠
川成
淵
深石砂入
成
等の類

所有主
姓名印

所有主
姓名印

字番號
田反別

山崩
押堀
薄石砂入
等の類

第二等損害
合反別
此譯
字番號
田反別

所有主
姓名印

右の如く損地の厚薄に區別ある限りは等級を立取調べし畑地も之に倣ふ

右之通り相違無之候以上

正副戸長
姓名印

用紙美濃紙

年月日

長官宛

乙第八十九號　同卅日

各區

正副區長

同　戸長

區長

姓名印

今般社寺地籍編製候に付神社は國幣社以下雜社小祠に至る迄荷も人民共有に係る者は遺漏あく寺院は本末寺と不論且其宗並に天台眞言兩宗へ歸入の舊修驗等自分

鎮坐地名		社格	社號	祭神
何郡何區何村字何		國幣中社 縣社 郷社 村社 雜社	何神社	何々

建物							
神殿	神樂堂	鳥居	何々	何々	〃	〃	〃
幾宇	幾宇	幾基					
拜殿	樓門	何々	〃	〃	〃	〃	〃
幾宇	幾宇	幾坪					
神饌殿	神庫	〃	〃	〃	〃	〃	〃
幾宇	幾宇	幾宇					

舊境内反別　幾反畝歩

現境内反別　幾反畝歩

氏子　幾戸

末社　境内　幾社　境外　幾社

所有地

田			畑			山		
反別	地價	反別	反別	地價	反別	反別	地價	反別
幾反畝歩	幾圓錢	幾反畝歩	幾反畝歩	幾圓錢	幾反畝歩	幾反畝歩	幾圓錢	幾反畝歩

林			何		
反別	地價	反別	反別	地價	反別
幾反畝歩	幾圓錢	幾反畝歩	幾反畝歩	幾圓錢	〃

勸請年月　何天皇年號干支月日　不分明ノ分ハ不分明ト記スベシ

由緒沿革

由緒沿革アル者ハ之ヲ記シナキ者ハ記セス

右取調候處相違無之候也

明治九年幾月幾日

戸長 姓名 印

祠官 姓名 印

區長 姓名 印

項目	記載
所在地名	何國幾郡何區何村字何
宗旨	何
寺格	大中小 本寺
寺號	何山何寺（何國何郡何村何寺末派）
建物	本堂 幾宇 / 衆寮 幾宇 / 位牌堂 何々 幾宇 / 幾宇 / 庫裡 幾宇
舊境内反別	幾反畝歩
現境内反別	幾反畝歩
檀家	幾戸
末寺	幾寺
所有地 田・畑・林・屋敷・山（反別・地價）	幾反畝歩 幾圓錢
創立年月	何天皇年号干支月日（不分明ノ者ハ不分明ト記スヘシ）

由緒沿革

由緒沿革アル者ハ之ヲ記シナキ者ハ記セズ

右取調候處相違無之候也

明治九年幾月幾日

住職
姓名 印

戸長
姓名 印

區長
姓名 印

縄受地ヘ自費ヲ以テ家屋ヲ建設セス類ヲ雖ども寺號存在セル分ハ悉皆別紙雛形ニ照準取調來十月卅一日限可差出此旨相達候事

但別紙雛形罫紙ハ區長物代理ヨリ於テ活刷頒布爲致候事

乙第九十號　同日

各區
正副區長
同戸長

官員休泊の節取扱方の儀に付ては明治六年第百八十八

號を以布達に及置候越も有之處追々緩慢に流れ無謂酒菓等差出之就中學務主任官吏の如きは生徒試驗學校巡視等屢々巡村致之候處同樣に取扱有之趣甚敷は巡廻の後ち關係の者集會飲食をなし右費用試驗入用抔と號し村内に課出する等間々不都合の取計致候向も有之哉に相聞方今專ら冗費を省き學事擴張教育の隆盛を圖り學校維持の方法等設立の際右樣不都合の儀有之候ては其障碍不少のみならず第一成規を戻り風俗を紊し尤も可戒事に付能く成規を守り諸事質素を主とし不取締無之樣篤く注意可致萬一心得違の者於有之は取調相當の可及處分儀も可有之候此旨相達候事

乙第九十一號　　同　　日

各區
學區取締
學校事務掛
學校教員

小學教則凡例第二項但書刪除候條此旨相達候事

乙第九十二號　　同　　日

各區
正副區長

昨明治八年管下小學調査表編成に付豈部頒布候條各校へ備置可申此旨相達候事

同　戸長
學校訓導
同事務掛

山梨縣布達ハ寫終

明治九年十一月

山梨縣第壹區常盤町四番地
又新社主
傍訓並出版人　内藤傳右衛門

賣捌所

甲府八日町　五明堂
同　柳町　井筒屋豐兵衛
山梨郡中牧村　芳賀用右衛門
同郡勝沼驛　萩原桑造
同郡日川村　志村機左衛門
八代郡駒飼驛　風間五左衛門
同郡鴨狩津向村　内藤吉致
巨摩郡韮崎驛　清水彦左衛門
同郡[illegible]川大門村　金生屋藤七
同郡明穂村　常盤竹代
同郡睦合村　伊奈平橘
同郡万澤驛　吉田富桑
同郡切石驛　佐野德平

同郡歟澤驛　早川省三
都留郡上野原驛　富田秀實
同郡谷村　石村彌兵衛

定價金八錢五厘